



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.130

2014.7.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

阿玉台式土器

— 東関東に花開いた特異な中期縄文土器 —

塚本師也

第14回 隣接する土器群との関係(2) —大木式土器—

阿玉台式土器分布域の北部、東北地方南部から栃木・茨城の北半に分布する大木式との関係を概観する。

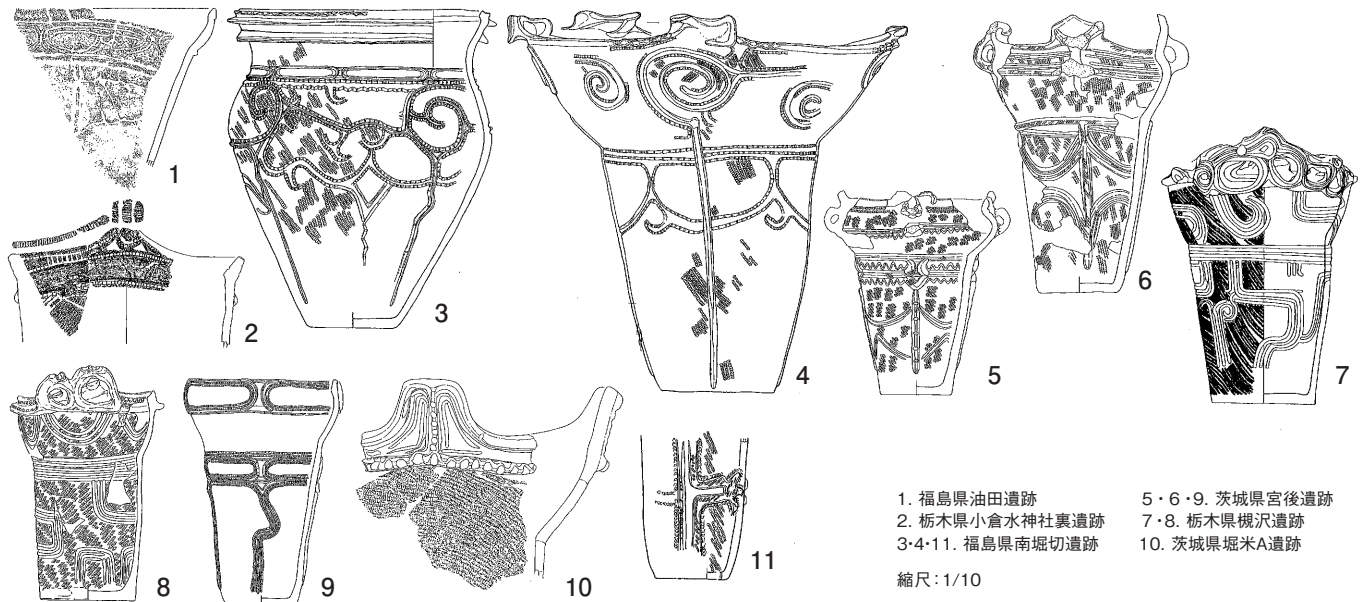
五領ヶ台式終末期には、東北地方南部にも楕円形区画文や押引文を特徴とする「竹ノ下式土器」(今村1985等)が分布する(第10図1・2)。この地域の大木7b式土器は、阿玉台式土器同様に、この土器を祖型とし、口辺部区画文、頸部素文帯、胴部隆帯文の3帯構成を引き継ぐ。無文化する阿玉台式に対し、大木7b式は2段LRの縦位施文を中心に、縄文施文を続ける。福島南半から栃木北半の大木7b式土器は、縄文地に有節沈線を施す「七郎内Ⅱ群土器」(塚本

1996等)で、口辺部の区画が狭くなるか、痕跡的な押捺を加えた隆帯等に変化する。多くは、頸部の施文域に弧状や渦巻状のモチーフを施し、体部に垂下隆帯を残し、この間に頸部同様のモチーフを施す(第10図3・4)。茨城県北半の大木7b式土器は、体部の垂下隆帯間を弧状もしくはX字状の沈線文で繋ぎ、「スワタイプ」(鈴木1980)と呼ばれる(筆者は「宮後タイプ大木7b式」と仮称。塚本2009)。この土器は、口辺部に楕円形区画を継続し、頸部の施文域を素文とする(第10図5・6)。これらの大木7b式土器は、口縁にS字状や粘土環を組み合わせた突起を付ける(第10図4~6)。

阿玉台Ⅲ・Ⅳ式期には、体部の垂下隆帯が消失し、弧状、クランク状、渦巻状の文様が横位に展開し、把手が大形化・中空化した、新たな一群が出現する(第10図7・8)。有節沈線は低調で、沈線が隆帯で文様を描く。

阿玉台式土器と大木式土器とは、文様の交渉が低調である。阿玉台式の体部文様を取り入れた大木7b式土器(第10図11)、大木7b式の狭い楕円形区画文(第10図3)を体部上位に取り入れた阿玉台式土器(第10図9)が僅かにみられる。茨城県北部の阿玉台Ⅳ式土器には、この地域の大木式に特徴的な口辺部隆帯の押捺を取り入れたものがある(第10図10)。

第10図 大木式土器および大木式の要素を受容した阿玉台式土器



- 1. 福島県油田遺跡
- 2. 栃木県小倉水神社裏遺跡
- 3・4・11. 福島県南堀切遺跡
- 5・6・9. 茨城県宮後遺跡
- 7・8. 栃木県槻沢遺跡
- 10. 茨城県堀米A遺跡

縮尺: 1/10

【参考文献】

今村啓爾、1985、「五領ヶ台式土器の編年—その細分および東北地方との関係を中心に—」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第4号
 鈴木裕芳、1980、「諏訪遺跡発掘調査報告書」日立市教育委員会
 塚本師也、1997、「浄法寺遺跡」栃木県教育委員会
 塚本師也、2009、「茨城県北部における大木7b式期の土器—特に七郎内Ⅱ群土器と所謂スワタイプについて—」『常総台地』16、常総台地研究会

【出典】

1. 福島県会津美里町教育委員会、2007、「油田遺跡」
 2. 栃木県教育委員会、1990、「小倉水神社裏遺跡 水木東遺跡」
 3・4・11. 白河市教育委員会、1984、「南堀切Ⅳ」
 5・6・9. 茨城県、2002、「宮後遺跡1」
 7. 栃木県教育委員会、1980、「槻沢遺跡」
 8. 栃木県教育委員会、1996、「槻沢遺跡Ⅲ」
 10. 東海村、2013、「堀米A遺跡(第3・4次調査)」

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

- 阿玉台式土器 隣接する土器群との関係(2)—大木式土器— 塚本師也 …1
- 考古学の履歴書 良き師・良き友に恵まれて(第16回) 渡辺 誠 …2

- リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第123回) 山田しょう …2
- 考古学者の書棚 『墓標の民族学・考古学』 中村耕作 …3

考古学の履歴書

良き師・良き友に恵まれて(第16回)

渡辺 誠

19. 京都から名古屋へ

育ちも身内にもまったく無縁な名古屋へ来るようになったのは、榑崎彰一先生からのお招きによるものであったが、ありがたく素直にお受けする気持ちもあった。次の2点である。

第1は、前項に関係することであるが、先に移動した形となった小沢一弘氏がいるうえに、近くには安藤正義・野村宗作氏らがあり、トチの実食の調査に多大なご協力を仰いでいたことがあった。安藤氏には徳山村、野村氏には白川村で大変お世話になり、これからさらに頻繁に出かけられるようになると思われたからである。奈良の住まいから出かけることに比べたら、なおさらである。結果は予想以上であった。

第2は、本業の考古学のこと、東海貝塚群で勉強できるという期待があった。この件については、角田先生からの御下問があった。先生はもう少し手元において仕込みたかったのに何故か、というありがたいお言葉であった。

私のお答えしたことは、高校時代に貝塚を歩き回り、そのため貝塚研究の第一人者である江坂輝弥先生のおられる慶応義塾大学に進学し、青森・岩手・福島県下ばかりでなく、熊本県下の貝塚発掘にも参加させて頂いた。出土した自然遺物の研究にも興味が高まってきていた。そのため身近で研究できるようになることは魅力であり、さらに次のようにご返事を申し上げた。

比べることもおこがましいのであるが、角田先生の古代学の柱が考古学と文献史学であることに比べると、縄文時代では文献史学に相当するのが自然科学であるとみられ、両者を統合した研究を進めることは、先生の古代学の継承となにも矛盾はしていないと思います。先生の教えは、名古屋で私なりに発揮できると思いますと、冷汗をかきながら申し上げ、転職の希望をお許し頂いたのであった。

またこのこととは別に、文献史学を含まずに近代まで考古学を伸ばし、物質文化史戦略を志向するようになっていた。これには民具学会の成立が大きく影響しているが、別に記すことにする。

20. 名残りの京都

他にも忘れられない思い出が京都には沢山ある。

第1は、『古代文化』の編集をまかされたなかで、縄文時代各期の特集を行ったが、とりわけ中期特集において、水野正好先生の縄文集落論を掲載させて頂いたことである。坪井清足先生が『岩波講座』の「縄文文化論」のなかで記されていて有名になっていた論文である。しかし本人の書かれたものでなければ、読んだ人には正当な評価ができないと申し上げ、何度も大阪府庁に出かけて書いて頂いたことである。ご馳走になった昼飯の味も覚えている。

このご縁で河内国府遺跡の発掘にも参加させて頂いた。

第2は、この雑誌のことで、諏訪の藤森栄一先生のところへ使いに行かされた時のことである。角田先生の書かれるものは、関西の歴史地理を本当に知っていなければ書けない上に名文であると激賞された。ところで君は先生の「恵美押勝の乱」を読んだことがあるかと聞かれ、まだだと答えたら怠け者、京都へ戻ったらすぐに6巻6号を開いて読めとお叱りを受け、恥ずかしい思いをした。

第3は、長岡京関係のことである。特にある縄文遺跡の発掘をしたく中山修一先生に御相談したところ、地主さんと交渉してくれたが、承諾は頂けなかった。しかし後に長岡京市の下海印寺遺跡を発掘させて頂いた。そして竹細工職人の牟田正義氏とも知り合い、道具類一切を頂いたが、後に日向市文化資料館に寄贈し、学芸員の玉城玲子氏によって目録を作って頂いたことはありがたいことであった。

略歴

昭和13年11月18日 福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
 昭和32年3月 福島県立磐城高校卒業
 昭和33年4月 慶応義塾大学文学部入学
 昭和43年3月 同上大学院博士課程修了
 昭和43年4月 古代学協会平安博物館勤務
 昭和54年8月 名古屋大学文学部助教授
 平成元年4月 同上教授
 平成14年3月 同上定年退職、同上名誉教授
 平成15年4月 山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
 平成18年7月 日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

隔月連載です。今回は石井則孝先生です。

6月に入って間もなく「考古学の履歴書 いくつかの出会いがあってⅡ」を

2005年4月から15回にわたりご連絡いただきました高橋良治先生の訃報をお知らせいただきました。

先生への感謝を胸にご冥福を心よりお祈り申し上げます。

編集子

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 123

ハヨニム洞窟(Hayonim Cave) ～ イスラエル ～ 山田 しょう

外国の発掘体験を自慢するつもりはない。国内に思い出深い遺跡もあるが、コボレ話など披露して、後で思わぬ問題になるとまずいので、この遺跡にする。故角張淳一氏には、中小企業の世界の厳しさを教えて頂いた。去った会社の通信誌に記事を書くのは妙な気もしたが、氏にまだ一筆も捧げていないことを想い、執筆をお受けした。なお写真は紙幅に余裕が無いので、インターネットの画像検索をお願いしたい。

* * * * *

1993年の夏、私は初めてイスラエル・パレスチナの地を踏んだ。その直前にクリントンが“it's time to change!”をスローガンに合衆国大統領に当選し、8月にはイスラエルとPLOの間で歴史的なオスロ合意がなされた。観光客も増え、イスラエルでも多くの人が希望を持っていた。しかし、後にそれは、さらに悪い結果を招くことになった。

ハヨニム洞窟は、イスラエル北部、地中海の海岸から15kmの、ワジ(涸川のある谷)を見降ろす標高250mの丘陵地の崖にある。新約聖書の舞台となったガリラヤ湖はさらに40km内陸だ。それは灌木が散在する、美しいワジだった。ここで私は、地中海気候がどういふものかを知った。日本列島には存在せず、体験しないと理解するのは難しい。この地では5～10月頃まで、雨はまともに降らず、枯れ草色の世界が広がる。訪問した最初の数回は体が合わず、暑さに消耗し、いつも腹を壊していた。

この洞窟には、新石器時代直前のナトゥーフアンの遺構の下に、若干の上部旧石器時代の包含層を挟んで、中部旧石器時代(ムステリアン)の包含層が4m以上にわたって堆積している。調査はハーヴァード大学のオッフェル・バル・ヨセフ教授をリーダーに、フランス、イスラエルの研究者が共同で、1992～99年に行われ、私は1993・94年の夏に全期間、1995年に一部参加した。

最大の目的は人骨の発見であった。この地域では、ムステリアン石器群に伴って、ネアンデルタールと解剖学的現代人の化石が見つかったが、バル・ヨセフと古生物学者の故エイタン・チェレノフは、石器群・微小動物相の分析から、ネアンデルタールが、20世紀前葉に発掘された大洞窟、タブーン洞窟のB層の石器群に、解剖学的現代人がその下位のC層の石器群に伴うと考えた。すなわち、ネアンデルタールと現代人の順序が、通常考えられる進化の順序と逆転したのである。これは、後に発達した熱ルミネッセンス法とESR法による年代測定によって決定的となり、彼らの名声を確立した。ヨーロッパにネアンデルタールが棲息していた約9～11万年前、アフリカに現れた現代人の祖先が中東に達し、その後、4～

7万年前頃、寒冷化のために、ネアンデルタールがこの地に南下したと考えられる。今はすっかり定着した「交替説」も、当時はまだ抵抗のあるものであった。

さて、タブーンB・Cの石器群は、三角形や楕円形のいかにもムステリアンらしいルヴァロワ技法による剥片石器で成っているが、それより古いタブーンD石器群(15～20万年前)は、不思議なことに、より「現代的」に見える縦長の「石刃」を多く含んでいる。この石器の主はいったい誰なのだろうか?それは、解明すればノーベル賞級の問題だった。ハヨニムは、下層にタブーンD石器群を豊富に含む洞窟である。

発掘には、バル・ヨセフ教授の名声を反映し、世界の錚々たる先生方のお弟子さん達が集まった。後から考えて見ると、これだけ「エリート学生」が集まる発掘も珍しいだろう。もっとも、だからと言って、彼らが発掘においても優秀ということではない。初めての者もいるし、発掘は50cm四方のグリッドを5cmごとに下げていだけだから、特に技術は要らない。ことにアメリカ人は年齢の上下など気にしないので、私は、子供のような学生や大して技術も無い人間に、「Shoh、そのスコップを取ってくれ!」「壁は真っ直ぐ落とせ」などと指示され、(お前たちに言われる筋合いはないよ)と心の中でつぶやきながら、笑顔で応じていた。私が参加した頃は、女性の割合がまだ半分強だったが、2年後にはほとんどが女性になっていた。世界各地から若者が集まる夏の発掘は、この現場に限らず、独特の雰囲気があり、いくつものロマンスが生まれる。幸せになった者も、悲しく終わったものもあった。

石灰岩の侵食で形成されたドーム型の洞窟は、大変広々としていて、頂部に「煙突」と呼ばれる径60cm程の穴が開き、そこまでの高さは25mあった。夏の中東にも関わらず、篩掛けで外に出る時以外は、日陰での発掘で助かった。特に年代測定と堆積物の鉱物学的分析に多大の労力が注ぎこまれ、洞窟内の平坦部にはラボが設置され、on-siteで鉱物の赤外線分光分析が行われた。発掘区のあちこちに熱ルミ・ESRのための放射線量計測器が設置され、土壌の微細形態の分析試料も数多く採取された。バル・ヨセフ教授が「世界一のムステリアンの発掘だ」と自慢していた。ただ、炉跡など人為的痕跡の考古学的処理自体は、いささか貧弱に感じた。

洞窟内には、貝塚のような細かい堆積層が重なり、日本の旧石器時代ではほとんど見られない炉跡が、10万年以上前にも関わらず、断面ではレンズ状の、平面では楕円形の灰色の層として、生々しく重なって検出されるのは衝撃だった。深掘りトレンチの壁に現れた細かい層の堆積を、正確に日本風の断面図に描き上げたところ、天才的と感嘆された。私は5cmずつ

人工層位で掘り下げる方法（傾斜のある層は傾きに添って5cmずつ）に耐えられず、「層位的発掘」ができないか考えたが、土層の分布を追っていくと、洞窟内の土壌の変成作用や、げっ歯類の巣穴痕で突如途切れてしまう。やはり、人工層位に従う他無いのだろうか。

* * * * *

考古学者の書棚

「墓標の民族学・考古学」

朽木 量／慶應義塾大学出版会（2004）

中村 耕作

朽木量氏の博士論文をもとにした『墓標の民族学・考古学』は2004年に出版された。ちょうど私が大学院に進学した時期であり、私の考古学観を形成する上で大きなきっかけの1つとなった。同書の内容を帯から引用すると、「日本の近世墓標とニューカレドニア日系移民の墓標という2つの素材をアセンブリ（遺物の組成）とハイブリディティ（異種混交）の視点から、墓標造立の歴史的・社会的背景を考察し、モノの作り手・使い手の関係を問い直す物質文化研究を構築する」と要約される。

もう少しだけ詳しく紹介すると、まず序章・第1部で物質文化研究の理論的視座、第2部で日本および欧米における墓標研究史が整理される。そこでは、ポストプロセス考古学などの視座をもとに、考古学の「型式」や民族学における「民族」など、文化を固定的に捉える概念への疑義が示される。これに対して朽木氏が用意したのが、実際のモノの組み合わせ（「アセンブリ」）、異種文化の混交（「ハイブリディティ」）という概念である。

第3部では日本の近世近畿地方における農村、第4部ではメラネシアのニューカレドニアの日系移民社会を舞台に、主として墓標の型式組成の変遷の分析を核とし、これに文書などの検討を加味して、墓標型式のハイブリディティが論じられる。墓標の資料的利点としては、型式の選択にアイデンティティや社会的立場が大きくかわること、年代が明記されていること、墓地での量的把握が容易であることなどが挙げられている。第3部では、石材流通などの作り手としての石工側からのアプローチと、各村の間関係性という造立者側の事情の双方が加味されている。

朽木氏の理論背景には鈴木公雄教授の近世考古資料への数量的アプローチ、同世代の研究者たちと刊行したイン・ホッター教授招聘の反応としての『民族考古 別冊』や『メタ・アーケオロジー』などがあり、近世農村とニューカレドニアという2つの異なったフィールドは「民族学考古学専攻」を持つ慶應義塾大学ならではのものと推察している。本書は、この2つの資料群に対し、資料と方法を共有した上で、歴史学的・民族学的双方の観点を総合してまとめられたも

9年にわたる調査の末、結局人骨は見つからなかった。タブーンD石器群の担い手は、今なお不明である。彼らは未だどこかに眠っていて、いつか、我々がその姿を知ることはあるのだろうか。写真を眺めながらハヨニムで過ごした日々を想う。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは佐野忠史さんです。

のであり、「物質文化研究」としての考古学の意義を十分に示していた。一般的に日本では考古学を文献史学・民俗学とならぶ歴史学の一分野と定義し、資料（モノ）と方法（型式学など）に特徴を求めるといった説明がなされてきた。一方、人類学の一分野と定義する場合でも、やはり形質人類学や民族誌学との相違はそこに求められる。本書は、その対象と方法を前面に押し出した理論的著作でもある。

私が本書から示唆された1点目は「モノ・作り手・使い手」の3者を意識した物質文化研究という視点である。「モノ」を単に文化・社会の反映とせず、再生産の媒体であるとみる考えはポストプロセス考古学でかねてより提示されてきた。そのモノに対して作り手・使い手の双方を総合的に論じる視点は新鮮であった。

もう1点は、それぞれの歴史的なプロセスを十分考慮した上で、2つの対象群を同時に扱うという方法である。これによって、「墓標」というモノの性格をあぶりだすのか、墓標を媒介として2つの「社会」を比較するのかが語り口次第であるが、動的な物質文化史を描き、比較するという試みに強い興味を抱いた。但し、朽木氏が歴史的背景を論じた材料は主として文献資料である。先史考古学の分野でこうした点を論じるには、純粋な考古学的なコンテキストを分析する必要がある。

昨年、私は博士論文をもとにした『縄文土器の儀礼利用と象徴操作』を上梓した。前期の浅鉢、中期の釣手土器、後期の浅鉢・注口土器という3つの文化事象について、墓や廃屋儀礼を舞台にした土器の取り扱いの時期的変化・空間的変異を、製作属性・使用属性・出土状況の3者を総合して検討した。朽木氏とは殆ど面識はないのだが、國學院大學関係者以外で、理論的・方法的に最も強い影響を受けた単著として、『墓標の民族学・考古学』は今も机上の棚にある。

アルカ通信 No.130

発行日 2014年7月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所 (株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp